

平成 10 年 度

# 教育研究員研究報告書

道 徳

東京都教育委員会

平成10年度

教育研究員名簿

第1分科会

地区名	学校名	氏名
文京大世練	誠之小 大森東小 桜町小 大泉小	柳瀬順子 ○椿田克之 菊池美天 星野典靖

地区名	学校名	氏名
小金井清瑞	南小 清瀬第九小 瑞穂第二小	◇日浦克子 中山厚子 関根孝之

第2分科会

地区名	学校名	氏名
台東大板	待乳山小 第一亀戸小 矢口小 北野小	本間豊子 ○大野真 鷺見二郎 牛山公人

地区名	学校名	氏名
江戸川三鷹町多	新田小 井口小 忠生第三小 北落合小	今泉洋子 ◇堀家千晶 三木進偉治 樺沢一彦

第3分科会

地区名	学校名	氏名
世田谷北葛飾	松原小 赤羽台西小 綾南小	◎宇治昭秀 吉成かおる ◇小松田早苗

地区名	学校名	氏名
府中調小平	新町小 八雲台小 小平第五小	山田令子 田中大吾 篠原まゆみ

第4分科会

地区名	学校名	氏名
杉並板練足	高井戸第三小 高島第四小 大泉第四小 綾瀬小	◇橋本ひろみ 三品孝之 畑和男 郡司美恵子

地区名	学校名	氏名
江戸川八王子田足	瑞江小 第四小 向台小 西新井	平山和良 徳丸幸夫 ○徳高弘幸 岸深雪

◎全体世話人    ○分科会世話人    ◇分科会副世話人

担当 教育庁指導部初等教育指導課指導主事 吉本恒幸

## 研究主題 よりよく生きる力を育てる道徳授業

### 目 次

◇ 研究主題について .....	2
◇ 研究の概要 .....	3
I 自己を見つめ主体的に生きようとする心を育てる指導の工夫 .....	4
1. 分科会テーマ設定の理由	
2. 児童の実態調査・分析	
3. 指導の工夫	
4. 実践事例・考察	
II 互いに認め合いともに生きようとする心を育てる指導の工夫 .....	9
1. 分科会テーマ設定の理由	
2. 児童の実態調査・分析	
3. 指導の工夫	
4. 実践事例・考察	
III かけがえのない生命を大切にしようとする心を育てる指導の工夫 .....	14
1. 分科会テーマ設定の理由	
2. 児童の実態調査・分析	
3. 指導の工夫	
4. 実践事例・考察	
IV 集団や社会と主体的にかかわっていこうとする心を育てる指導の工夫 .....	19
1. 分科会テーマ設定の理由	
2. 児童の実態調査・分析	
3. 指導の工夫	
4. 実践事例・考察	
◇ 研究の成果と今後の課題 .....	24

## 研究主題

### 「よりよく生きる力を育てる道徳授業」

#### ◇ 研究主題について

これからの時代を担う世代に「生きる力」を養うことが求められてから、児童の教育に携わる我々は、様々な形でその方途を探求し実践している。しかし、社会の現状に目を向けると、児童は物質的に恵まれるとともに、ますます便利になる様々なサービスを楽しむことに慣れ、自らの希望や目標をもって主体的に生きようとする意識が薄れつつある。また、拡大を続ける各種メディアからの情報に翻弄され、思考が短絡的になりがちである。進行する犯罪の低年齢化や、いじめや不登校など、児童の心の発達過程に起因すると考えられる問題は後を絶たず、薬物に依存したり自らの生命を絶ったりすることで現実から逃避しようとする青少年も増加している。

先に示された「中央教育審議会」の答申をみると、個人の利害損得の優先・責任感の欠如・物欲主義・自己実現と健全な社会構築のための努力の軽視・ゆとりを軽視した利便性や効率性優先の生活、といった大人社会のモラルの低下を指摘し、次世代を育てる心を失う危機を改めて訴え、「心を育てる場」としての学校の役割、とりわけ道徳教育の充実を緊急の課題として強調している。また、「教育課程審議会」の答申においても、「人間としてよりよく生きていく態度の育成」の重要性を示し、道徳の時間の改善点や各教科・領域との関連を重視した道徳教育の在り方を、細かに指摘している。

我々は、これらの現状と社会の要請を踏まえ、「よりよく生きる力を育てる道徳授業」を研究主題として掲げ、これまでの研究を持続し発展させていくとともに、新たな発想のもとに課題解決の方策を見いだしていかなければならないと考えた。

そこで、我々は今年度の研究を進めるに当たり、4つの分科会を構成した。そして、人間のよりよき生き方の基礎をなす様々な道徳の内容が4つの視点でとらえられていることに即して、それを各分科会で担当し、それぞれに目指す児童像を掲げるとともに、分科会テーマ・仮説を設定し、研究を進めてきた。道徳は、人間の一生を通じた連続性と、家庭・学校・地域社会という横の広がりofのすべてにかかわるものである。人間の活動全般にわたる道徳の内容を焦点化して研究を進め、互いに学び合い、検証し合う中で、内容の全体構成と発展性をより明確にし「よりよく生きる力を育てる道徳授業」という研究主題に迫っていきたいと考えた。

各分科会の研究の視点は次の通りである。

第1分科会 「自己を見つめる心」

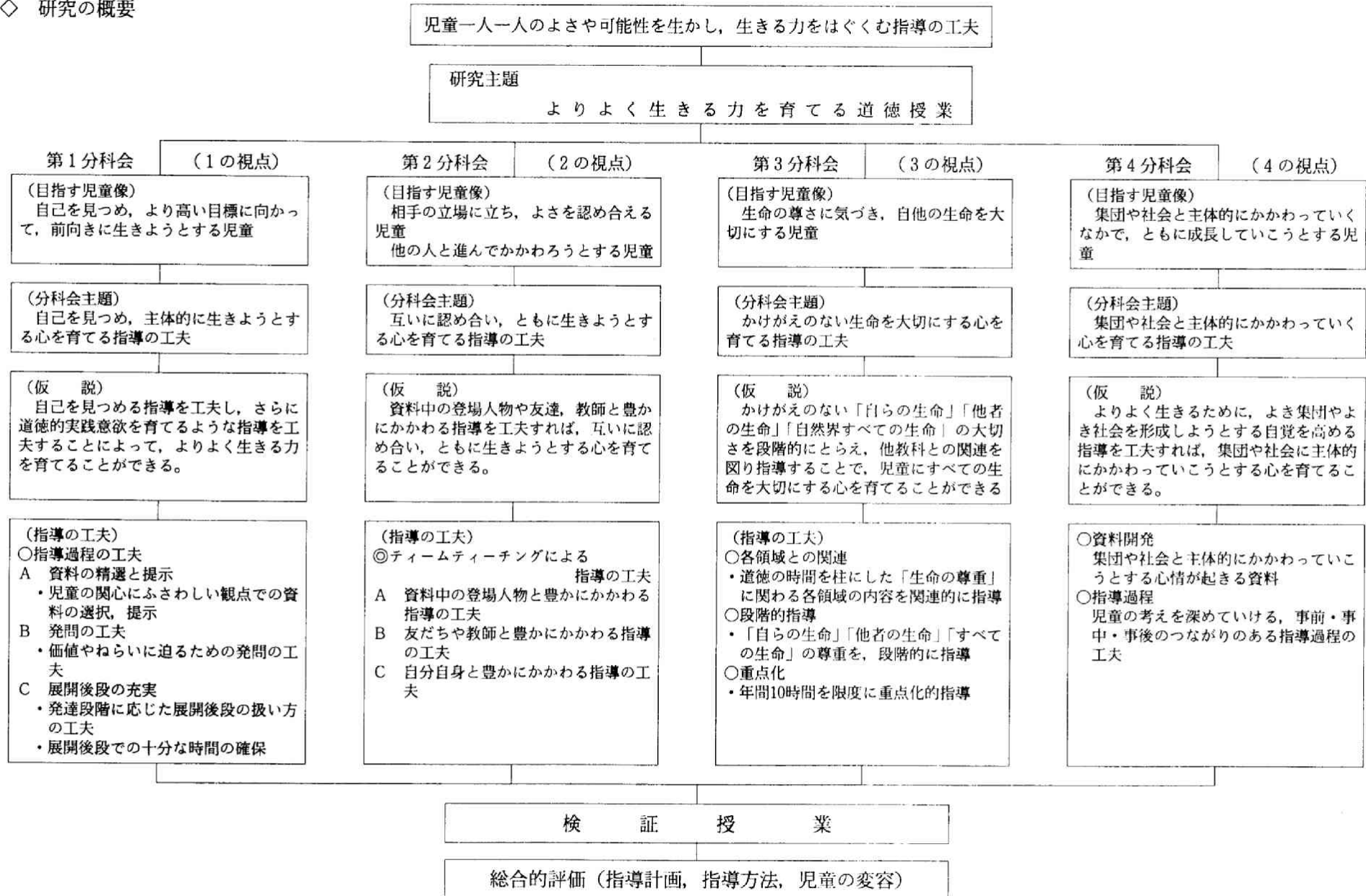
第2分科会 「ともに生きようとする心」

第3分科会 「自他の生命を大切に作る心」

第4分科会 「集団や社会と主体的にかかわっていかようとする心」

我々は今回の研究を充実させることにより、21世紀を担う児童に培う「生きる力」として、道徳的心情・道徳的判断力・道徳的实践意欲と態度などの道徳的实践力を育成するため、自らの資質の向上を目指すとともに、これからの教育に直接に貢献し得る研究となることを目指すものである。

◇ 研究の概要



## I 自己を見つめ、主体的に生きようとする心を育てる指導の工夫（第1分科会）

### 1 分科会テーマ設定の理由

世界にただ一人しかいない自分、しかもたった一度の人生である。誰もが生きる喜びを見いだしたり、日々の生活に希望を見いだしたりして、豊かな自己実現に向けてよりよく生きたいという願いをもっている。人は自分自身のことを正しく見つめ、理解し、自分は何をすべきかを考えて前向きに生きようとするとき、豊かな自己実現に向かって着実に歩み出すのではないだろうか。

ところで、児童の実態については一般的に、生活環境の変化により、「人とのかかわり」「遊びの空間」「自分のことを考える時間」などが不足し、心の成長に影響を与えていると言われている。しかし興味のあることには熱心に取り組み、苦手なことでも目的がはっきりすれば続けてがんばりたいという気持ちも見られる。そして、達成感を味わうことが、次への意欲につながることも見逃せない。

以上のようなことから、自分自身を見つめ、努力してみようと思う自分、やればできると思う自分に出会ったとき、前向きに生きようとする意欲がわき、主体性が確立され自律的な人間が形成されると考える。そのためには、子どもたち一人一人が今までの自分を振り返り、自分のいたらなさを受け入れながらも、自分の弱さを理解し、自らを高めるための課題を見つけることが大切である。それを支援することにより、より高い目標に向かって、前向きに生きようとする意欲が培われ、それが「よりよく生きる力」につながると考える。

よって、第1分科会では「自己を見つめ、より高い目標に向かって、前向きに生きようとする児童」を目指し、本主題を設定した。

### 2 児童の実態調査・分析

#### (1) 調査目的

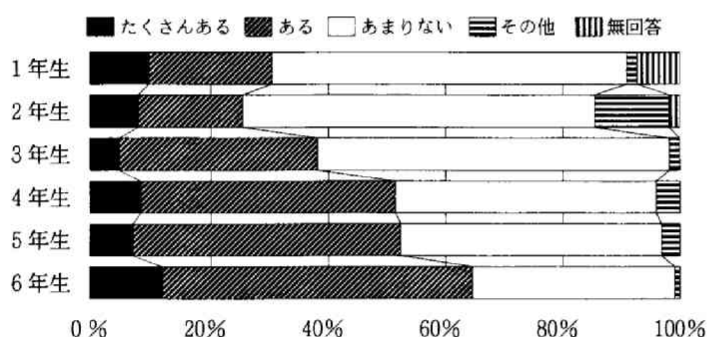
児童が自分自身のことについてどのように認識しているのか、また、教師の考えと児童の実態に相違があるのかななどを調査し、今後の指導の工夫に役立てる。

#### (2) 調査方法

都内7校の児童、第1学年から第6学年の合計1,320名を対象にして、一部自由記述を含む選択肢法による質問紙調査を行った。内容は全学年共通とした。

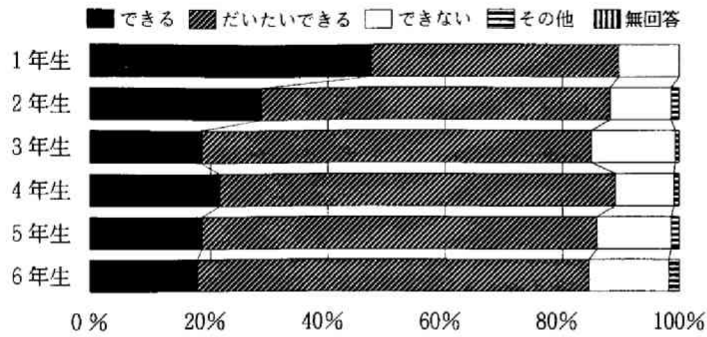
#### (3) 結果と考察

設問1：あなたは、友だちの考えや行動にあわせてしまうことがありますか。



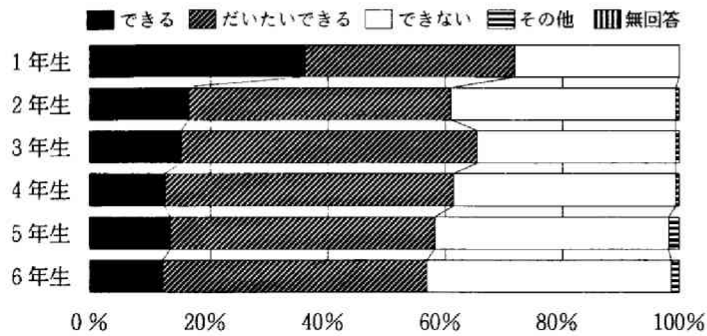
この設問は、自分の考えをもって行動している児童がどれくらいいるかを調査したものである。「たくさんある」「ある」を見ると高学年になるにつれて、友だちの考えや行動に合わせてしまう傾向が見られる。

**設問 2：あなたは、自分がよいと思うことを行動に移すことができますか。**



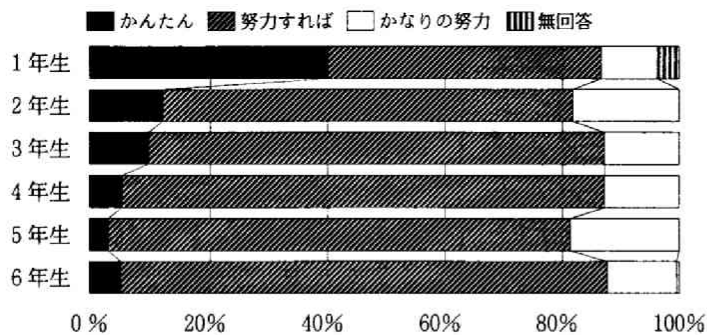
この設問は自分の考えを行動に移せるかを調査したものである。大部分の児童は行動に移すことができることが分かる。

**設問 3：あなたは、自分の長所を言うことができますか。**



この設問は自己の理解の程度を調査したものである。自信をもって、できると答えている児童は、学年が進むにつれて減っていく傾向が見られる。

**設問 4：あなたが今までに立てた目標は、どれですか。**



この設問は自己の課題のもち方について調査したものである。高学年になるにつれて「かんたん」が減り、「努力すれば」が増えている傾向が見られる。

**(5) 全体を通して**

設問 2、設問 4 からは、自分がよいと思うことは行動に移したり、今の自分よりさらによくなろうと努力したりしていることが分かる。しかし、設問 1、設問 3 からは、高学年になるにつれて、友だちの考えや行動に合わせてしまったり、自分の長所を言えなかったり、といった児童が増えていく実態から、自己を深く見つめていないので、自信をもって行動することができないのではないかと考える。これらの児童の発達段階における特徴から、学年が上がるにしたがい、自己を見つめる場を十分に確保することが必要ということも分かった。

自己理解が明確になれば、最適な課題を見つけることができ理想とする自分に近づくことができるようになると思う。この結果、第 1 分科会では自己を見つめさせることに重点をおいた指導をする必要があるととらえ、道徳の授業での発達段階を考慮した自己を見つめる時間の充実を図るための工夫が必要ではないかと考えた。

よって、第1分科会では自己を見つめさせることに重点をおいた指導をする必要性があるととらえ、道徳の授業での発達段階を考慮した自己を見つめる時間の充実を図るための工夫が必要ではないかと考える。

### 3 自己を見つめ、主体的に生きようとする心を育てる指導の工夫

第1分科会は、自己を見つめ、主体的に生きようとする心を育てるために、次のような点を工夫し、研究仮説の検証を目指した。

## 主体的に生きようとする心

より高い目標に向かって前向きに生きようとする意欲

### 道徳の時間

#### ○指導過程の工夫

- A) 資料の精選と提示
  - ・児童の関心にふさわしい観点での資料の選択、提示の工夫
- B) 発問の工夫
  - ・価値やねらいに迫るための発問の工夫
- C) 展開後段の充実
  - ・発達段階に応じて展開後段の扱い方の工夫
  - ・展開後段での十分な時間の確保

#### ○表現の工夫

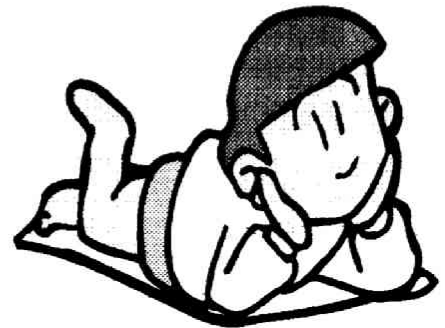
- D) 意見交換の工夫
- E) ワークシートの活用
- F) 役割演技の活用

③ 自己課題

② 自己理解

① 自己受容

自己を見つめる



### 全教育活動

- ア) 体験活動
  - ・身近な場での経験
- イ) 各教科・領域との関連
- ウ) 学級経営における工夫
  - ・受容的、共感的雰囲気づくり
  - ・教室環境の整備。



(1) 「自己を見つめる」について

本分科会では、「自己を見つめる」とは「自己受容」「自己理解」「自己課題」の3段階があるとして、次のようにとらえた。

自己を見つめるとは、

自己受容、自己理解、自己課題の3つのステップを経ること

- 自己受容…今までの自分を振り返り、よさやいたらなさなどすべてのことを肯定的に認める。
- 自己理解…他とのかかわりを通してさらに自分を深く見つめ、よさや可能性があることを知る。
- 自己課題…自らを高め、よさや可能性を実現するために、今の自分にあったより高い課題や目標を見つける。

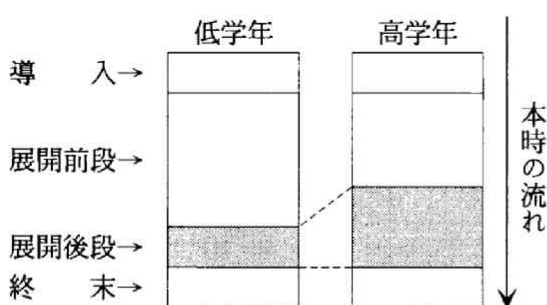
(2) 「指導過程の工夫」について

本分科会では、児童一人一人がより高い目標に向かって、前向きに生きようとするために、道徳の時間で展開後段の自己を振り返る場の確保と充実を図ることが大切であるととらえた。そのために児童が共感しやすいような資料を精選すること、また、資料を通して価値に迫るための発問を精選することで、展開後段の場を十分に確保できると考える。

指導過程の工夫とは、

展開後段の自己を振り返る場の確保と内容の充実

① 発達段階に応じた展開後段の扱い方



低学年では資料を通して道徳的価値を十分に理解し自己を振り返ること、高学年では自己をより深く見つめることが大切ではないかという考えから、資料を通して話し合う時間（展開前段）と自己を振り返る時間（展開後段）を発達段階に応じて変え、充実を図る。

② 展開後段での十分な時間の確保

展開後段の時間を十分に確保することで、自分自身を振り返ったあと、さらに友だちと意見交換をする話し合い活動や、相互交流を行って自分の考えを整理できるようなワークシートを取り入れることができ、自己をより深く見つめることができると考える。

(3) 「自分の考えを表現する方法」について

自分の考えを確認したり整理できたりするために役割演技やワークシートを活用すると、さらに道徳的価値を理解できると考えた。また、多くの考えに接し、客観的に自己の考えを見つめ、深められるようにするために、ワークシートの形式を工夫した。

#### 4 実践事例（第5学年）

(1) 主題名 希望をもって、前向きに生きる 1-(2)

資料名 「ヘレンと共に－アニー・サリバン」(文部省資料)

(2) ねらい より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする心情を養う。

(3) 指導計画

事前	学級活動	目隠しをしてブラインドウォークをする。(ア、イ) ブラインドウォークについての感想を発表する。
	ゆとりの時間① ②	映画「奇跡の人」を観る。(ア、イ) 映画「奇跡の人」の感想文を書く。
本時	道徳	資料「ヘレンと共に－アニー・サリバン」を読み、話し合う。
事後	学級活動	障害のある方の話を聞き、交流をする。(ア、イ)
	道徳	星野富弘氏の生き方について話し合う。(1-(2))

(4) 指導の工夫（本時における重点）

自己を見つめ、主体的に生きようとする心を育てる指導の工夫。

- ・3つの心身障害学級が設置されている授業校の特色をふまえ、児童の関心にふさわしい観点で、資料の選択をした。

- ・ワークシートを互いに交換しあい、アドバイスをしあえる意見交換の場を設定し、他者の考え方や気持ちを知り、より深く自己を見つめられるようにした。

(5) 展開

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	留意点
導入	1 映画・奇跡の人について思い出す。	問 映画・奇跡の人を見たとき、みなさんはどんなことを感じましたか。 ・僕もがんばろう。 ・かわいそう。 ・ヘレンはすごい。	○ 事前に視聴覚教材を用い、本時の学習に生かす。(A、イ) ○ 何でも受け入れられる学級の雰囲気をつくる。(ウ)
展開	2 資料「ヘレンと共に－アニー・サリバン」を読んで話し合う。	○まわりの人のかげぐちを聞いたアニーの気持ちを考えましょう。 ・自分を信じよう ・自分は正しいんだ。 ・やり方を間違えたのかなあ。 ◎アニーの手のひらに何度も WATER と書くヘレンを見たときのアニーの気持ちを考えましょう。 ・やっぱり、間違ってたな。 ・ヘレン、よくがんばったね。	○ 心に深くしみいるように、抑揚に気をつけて範読する。(A) ○ アニーのマイナス面の気持ちについても意見を引き出すようにする。(B) ○ うなずきや言葉かけをして教師の共感を児童に伝えるようにする。(ウ)
	3 自己を見つめる。	○今日の学習をして、学んだこと、感じたことをワークシートに書きましょう。 ・私にはできないなあ。 ・感動したなあ。	○ 書く時間を十分に確保し、書けない児童には机間を巡りアドバイスをする。(D) ○ ワークシートを意見交換する。(C、D、E)
終末	4 教師の話を聞く。	アニーとヘレン2人の後日談について話をする。	○児童の心に余韻を残すようにする。

(6) 考察

- ・ブラインド・ウォークや視聴覚教材の使用など、児童に興味・関心をもたせる指導計画を立てることは、とても有効であった。
- ・総合単元的な道徳学習という観点で指導計画を立てる場合は、各教科、領域それぞれのねらいで重なる部分について関連させていくことが重要であった。
- ・自己を見つめるうえで、展開の時間を十分に取し、ワークシートを相互交流したことは有効であった。

## II 互いに認め合い、ともに生きようとする心を育てる指導の工夫（第2分科会）

### 1 分科会テーマ設定の理由

人間が、社会的存在である以上、他者との深いかかわりをもちたいと願うのは、人間の本性である。子どもたちは、本来だれもが皆、よりよく生きようという意欲とよりよく生きたいという願いをもっている。よりよく生きることは、他の人と豊かにかかわることによって実現していき、自分の人格と同様に他の人の人格を尊重し、相互にかかわりをもつことにより、望ましい集団や社会が形成されると考える。

さらに、各個人が、かけがえのない存在として認められ、互いの共通点や違いを認め合い、互いに尊重される豊かな人間関係の中で自分自身のよさに気づき、自信をもって他の人とともに生きようとするのが「よりよく生きる力」につながると考える。

そこで、第2分科会では視点2とのかかわりから、他の人とかかわりをもとうとする意欲、相手の気持ちを考えようとする意欲、自分の気持ちを表現しようとする意欲、互いに高め合おうとする意欲を高めることにより、ともに生きようとする心が育つと考えた。友達の中の自分を意識し、自分を取り巻く仲間を互いに認め合い、ともに生きようとする心を育てることが大切だと考え、分科会テーマを設定した。

### 2 実態調査・分析 調査日：平成10年7月

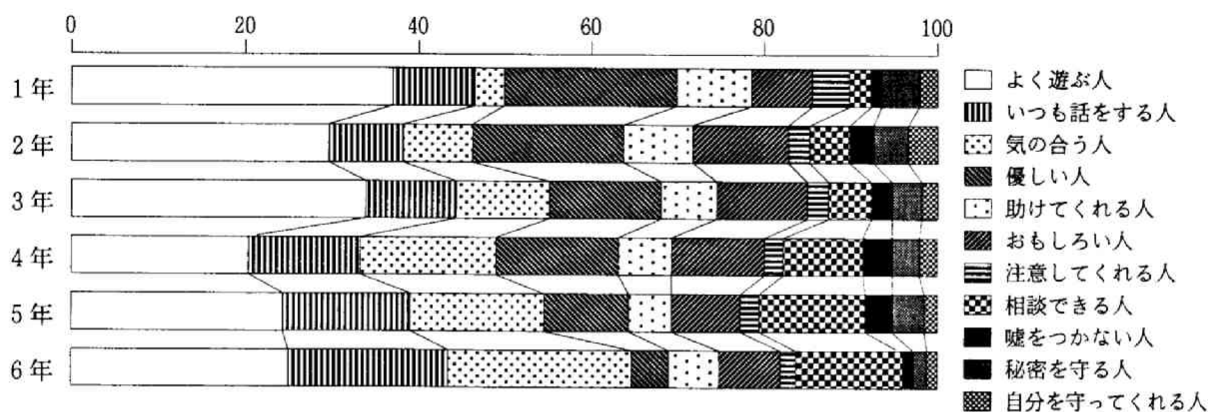
(1) 調査目的：友達というものをどのように意識しているか、その友達とどのようにかかわっているか、その実態をつかみ、今後の研究の資料として役立てる。

(2) 調査方法：調査対象は都内8小学校1～6年生 1520人

選択肢により質問紙法を用い、設問1、2は全学年、設問3は3～6年生を対象として調査した。

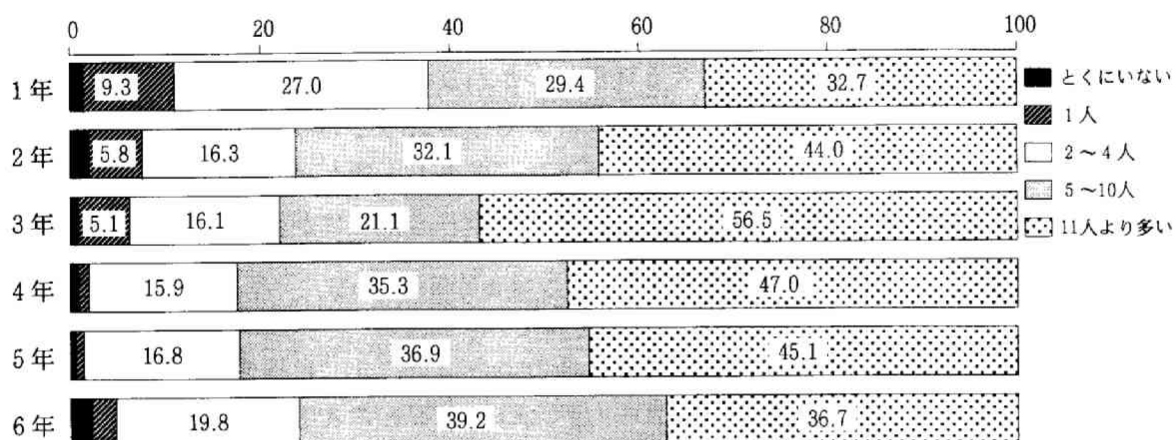
(3) 結果と考察

設問1 あなたにとって友達とはどういう人ですか。次の中から選びましょう。



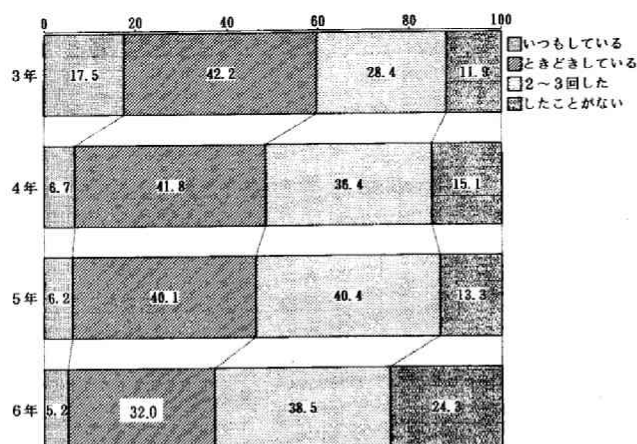
各学年とも「よく遊ぶ人」が最も多いが、高学年になるにつれ「いつも話をする人」「気の合う人」「相談できる人」などが増えてきて、仲間意識が芽生えてきていることが分かる。友達とのかかわりが深まり、単なる遊び相手から話相手・相談相手となってきたのである。特に様々な悩みが生まれる高学年にとって、相談相手としての友達は非常に重要なものであり、友達同士のつながりが深まってきた証拠でもある。

設問2 学校の中に、なかのよい友達が何人くらいいますか。

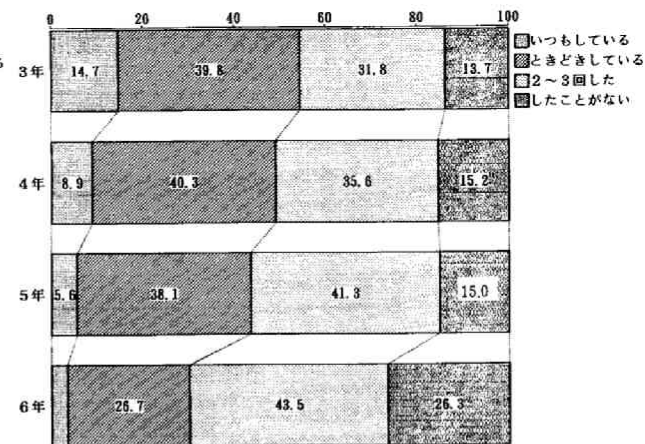


ギャングエイジとも呼ばれ行動範囲も広がってくる3年生が最も友達がいると答えた。4年、5年、6年と学年が上がるにつれ「11人以上」が減少し、「2～4人」「5～10人」が増えている。これは高学年になると友達とのかかわりも深まりまとまってきて、「友達は数より質」となってくるためと考えられる。また調査してみて、表面上では友達がいるように見えるが、「とくにいない」と答えた児童もいた。遊んでいる子＝仲のよい友達とは考えていない子もいることが分かった。

設問3-(1) なかまはずれにされている人を遊びにさそったことがありますか。



設問3-(2) 悪口を言われている人や、いじめられている人をかばったことがありますか。



道徳的实践において「いつもしている」「ときどきしている」「2～3回した」という答えは、75%～90%と多いが、学年が進むにつれ減少するといった傾向が見られる。これは、児童に、親切にしたい気持ちはたくさんあるが、人の目を気にするあまり学年が進むほど行動に移すことをためらうようになるからと考えられる。

一方、紙面には示されていないが、その実践理由をみると、「そうすることが相手にとってよいと思ったから」という項目の割合が増加している。これは、相手の立場や状況を考慮し、かかわりをもとうとする意欲の表れであり、「いつもしている」「ときどきしている」子は、複雑な人間関係の中にあっても、相手に対する共感的な気持ちをもち続けていると考えられる。

「相手の立場に立って考える」とは「互いに認め合うこと」の一つであり、「ともに生きようとする心」でもある。そのような心情を育成することは、とても重要であると考えられる。

### 3 互いに認め合い、ともに生きようとする心を育てる指導の工夫

児童一人一人の道徳の時間におけるかかわりを豊かにするために、TTを導入し、一人一人の児童の個性を尊重した柔軟な指導や多様な視点からの児童理解を一層深めていくことが大切であると考えた。また、道徳の時間におけるかかわりを次の3つの視点からとらえ、工夫していくことにした。

- A 資料中の登場人物と豊かにかかわる指導の工夫
- B 友達や教師と豊かにかかわる指導の工夫
- C 自分自身と豊かにかかわる指導の工夫

#### 道徳の時間におけるティームティーチングのよさ

- ア 複数の教師の目で、児童を多面的に見取ることができる。
- イ 児童のニーズにゆとりをもって、きめ細やかに対応できる。
- ウ 児童同士、児童と教師のかかわりを豊かにできる。
- エ パターン化、マンネリ化された授業からの脱却を図り、児童に新鮮な印象を与えることができる。
- オ 授業後の考察において、児童の多面的なとらえ方を教師が共有でき、児童理解を深めることができる。
- カ 複数の教師の個性や能力を指導に生かすことができる。
- キ 学級を開き、学校全体の教師が児童を見守る雰囲気づくりができる。

	指導の工夫	TTにおける工夫
道徳の時間における三つのかかわり	<b>A 登場人物と豊かにかかわる指導の工夫</b> ○児童の心情に訴え、資料の世界に浸れるような資料提示の工夫 ○多様な価値観を引き出せるような発問の工夫 ○自分の思いや考えを表現できる動作化や役割演技の工夫	・資料をT1、T2が役割を分担して読むことにより、臨場感を出す。 ・T1が役割演技を担当し、T2が見ている児童にインタビューするなど役割演技の工夫をする。
	<b>B 友達や教師と豊かにかかわる指導の工夫</b> ○友達の思いや考えを認め合うことのできる話し合い活動の工夫	・児童の考えによって分かれたグループの話し合いにT1、T2が分担して参加し、児童の発言を受容する。 ・児童の考えを広げたいときや深めたいとき、T2がゆさぶりをかけたり、補助発問をする。 ・教師の個性を生かした説話をする。 ・板書を分担して行い、もう一方の教師が児童の反応を共感的に受け止める。
	<b>C 自分自身と豊かにかかわる指導の工夫</b> ○ねらいとする価値について振り返ることができるような発問の工夫	・T1、T2が一人一人の児童に働きかけることにより、体験に基づいた反応を引き出す。
TTのよさが生きる条件 ① 資料 葛藤場面や複数の登場人物の心情を追うことでねらいに迫るもの ② 時間 T1、T2と児童のかかわり（話し合いの工夫） 事前、事後のT1、T2同士のかかわり（役割分担の明確化・座席表メモの利用） ③ 空間 座席配置の工夫 グループづくり		

#### 4 実践事例（第4学年）

- (1) 主題名 信頼のきずな 2-(3)  
 資料名 「大きな絵はがき」(出典 東京書籍 どうとく「ゆたかなところで」)
- (2) ねらい 友達と互いに信頼することの大切さを知り、友情を深めていこうとする心情を育てる。
- (3) 互いに認め合い、ともに生きようとする心を育てる指導の工夫（次頁上段へ）
- (4) 展開

	学習活動	主な発問と児童の反応
導入	1. 自分が考えている「友達」について発表する。	○「友達」とは、どんな人のことですか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・なかよくできる人。</li> <li>・一緒に遊ぶ人。</li> <li>・気が合う人。</li> </ul>
展開	2. 資料「大きな絵はがき」を聞き、広子の迷っている気持ちを中心に話し合う。  (1) 自分の考えをワークシートに書く。  (2) 小集団に分かれて話し合う。	①転校していった仲よしの正子さんからの絵はがきを読んで、広子さんはどんな気持ちになったでしょう。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・来年の夏行ってみよう。</li> <li>・なつかしい。</li> <li>・うれしい。</li> </ul> ②不足料金のことについて、母と兄の考えを聞いた広子さんは、どんなことを考えたのでしょうか。 <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>〔教えるグループ〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・正子さんがまた同じ間違いをしたらこまるから教えてあげよう。</li> <li>・友達として教えてあげないのはよくない。</li> </ul> </div> <div style="width: 45%;"> <p>〔お礼だけのグループ〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・せっかく手紙をくれたのに相手がいやな気持ちになるからこのままにしよう。</li> <li>・自分も間違いがあるから言わないでおこう。</li> </ul> </div> </div>
開	(3) グループでの話し合いを全体の場で発表する。	・はじめ、いやな気持ちになるかなと思ったけど言ってあげたほうが正子さんにいいことだからと思ってこっちにした。
終末	3. 今までの生活を振り返り自己を見つめる。  4. 教師の説話を聞く。	③「やっぱり書こう。」と思った広子さんは、どんな気持ちだったのでしょうか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり友達だから言ってあげよう。</li> <li>・また同じ間違いをして正子さんもいやな気持ちになるから教えてあげよう。</li> <li>・後から言うとう傷つく。</li> </ul> ④友達のことを思ってなにかしてあげたことがありますか。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・けんかをした友達にあやまったほうがいいよと言ってあげた。</li> </ul>

- (5) 考察 ① 役割分担による資料提示は、効果的であった。  
 ② 小グループにT1、T2が入ることにより、話し合いが活性化した。  
 ③ グループでの話し合いにより、友達の意見と自分の意見の同じところや違うところに気付き考えを深めることができた。

**A. 資料中の登場人物と豊かにかかわる指導の工夫**

☆①資料をT1、T2が役割分担しながら読むことによりイメージを膨らませ、主人公の気持ちを考えやすいようにする。

**B. 友達や教師と豊かにかかわる指導の工夫**

☆①小集団の話合いにT1、T2が加わることにより話合いを活性化する。

☆②2つのグループに分かれて話し合うことにより、友達の意見と自分の意見の同じところや違うところに気付かせ考えを深める。

**C. 自分自身と豊かにかかわる指導の工夫**

①書く活動を取り入れることにより、課題に対してしっかりした考えをもたせる。

☆②自分の考えを発表し聞いてもらう機会を増やすことにより、自己実現の喜びを味わわせる。

☆印はチームティーチングのよさを生かした指導の工夫

教師の働きかけ (T1)	教師の働きかけ (T2)	指導上の留意点
○.ねらいとする価値についてイメージを膨らませる。	○学習問題を提示する。	・児童が素直に思っていることで、表面的にとらえているものでもよい。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">T1、T2で役割分担しながら資料を範読する。</div> ○発問をする。 ○自分の考えをもたせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">小集団をT1、T2で分担し話合いに参加する。</div> 「教える」考えのグループに加わる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">                     それぞれのグループごとに                      ○考えのまとまらない児童に助言する。                      ○ワークシートをもとに話し合う。                      ○自分の考えと友達の考えの同じところや違うところに気付かせる。                      ○意見をカードに書く。                 </div> ○全体での話合いを進める。 ○発問する。	○板書をする。 ○ワークシートを配る。 「お礼だけ」の考えのグループに加わる。 ○考えの変わった児童を意図的に指名できるように知らせる。 ○板書する。	・定型外郵便を見せ補足する。 ☆T1、T2で役割分担しながら資料を範読することにより、イメージを膨らませ、主人公の気持ちを考えやすいようにする。(A①) ・書くことにより課題に対して自分の考えをもたせる。(C①) ☆小集団の話合いにT1・T2が加わることにより話合いを活性化する。(B①) ☆2つのグループに分かれて話し合うことにより、友達の意見と自分の意見の同じところや違うところに気付かせ、考えを深めるようにする。(B②) ☆自分の考えを発表し聞いてもらう機会を増やすことにより自己実現の喜びを味わえるようにする。(C②) ・広子の正子に対する信頼に気付かせる。
○自分の体験を振り返らせる。	○机間指導をする。	・その時の気持ちを押し返す。
○質問や補足をする。	○子どももののころの体験を語る。	

- ④ 書く活動を取り入れることにより、課題に対して自分の考えをもたせることができた。
- ⑤ 発表の機会を増やすことにより、自己実現の喜びを味わえることができた。
- ⑥ 全体での話合いにおけるT2の役割をどうするか課題が残った。

### Ⅲ かけがえのない生命を大切にすることを育てる指導の工夫（第3分科会）

#### 1 分科会テーマ設定の理由

現在進行しつつある環境の変化は、子どもたちから生命の尊さに触れる機会を奪い去るとともに、かえって生命軽視の考え方を、植え付ける結果を招いたと思われる。我々の学級・学校また地域社会に生活する子どもたちからも、その影響を感じ取ることができる。疑似の生死と現実の生死の混同。かわいいことだけを理由にペットを飼育する自分勝手な動物への接し方。このように児童が変容してきた原因は、自然環境や地域社会・家庭環境の変化、生命を軽視する情報の氾濫などが考えられる。

このような環境に置かれながらも、けなげに生きていこうとしている子どもたちを見るにつけ、人間がよりよく生きるための根源をなす「生命の尊さ」に子どもたちが気づき、主体性をもって力強く生きていくことを切望するとともに、そのために我々がなすべきことを追究する必要を強く感じる。

我々第3分科会では、道德部会の全体主題「よりよく生きる力を育てる道德授業」を受け、よりよく生きる力の基底をなすものを「生命尊重」の精神であると位置付けた。子どもたちが、生命がかけがえのないものであることに気づき、すべての生命を大切にしようとする心が育つことで、子どもたちに「よりよく生きる力」が培われるものと考えている。

#### 2 児童の実態調査・分析

##### (1) 調査目的

生命に対する児童の意識や経験を把握し指導に役立てる。

##### (2) 調査方法

都内6校の1～6学年児童 合計1208名に一部自由記述を含む選択肢法による質問紙法による調査を行った。内容は全学年共通とした。

##### (3) 結果と考察

**設問1 あなたは生命を大切だと思いますか。またどうしてそう思いますか。**

「生命は大切」とは思うが、どうしてかと問われると「生きていけない・大切だから」など漠然としか答えられない現在の児童の生命に対する意識がとらえられる。

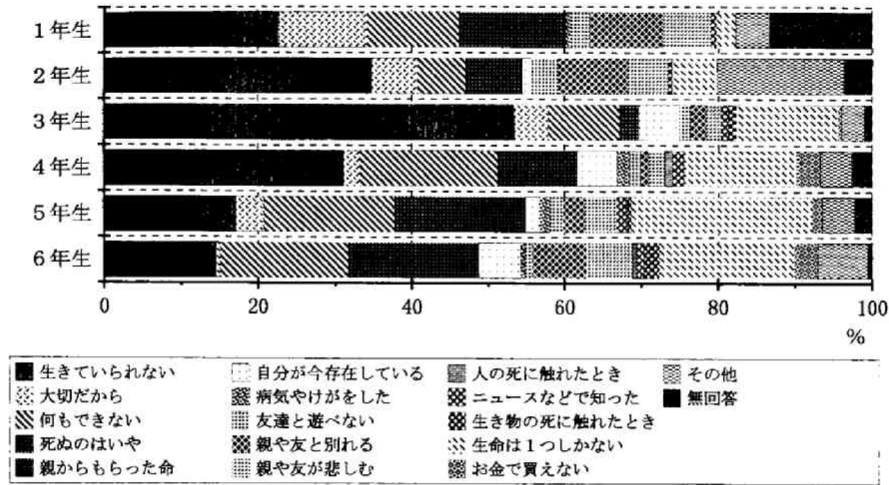
身近な人の死に直面した経験をもつ児童は調査対象児中3名しかおらず、また身近な人の誕生に触れた経験から答えた児童も8名しかいない。

生命についての情報はもっぱらテレビなどの間接的なものであり、心の痛みや喜びを伴わずに生死に触れている現実がうかがえる。

このようなことから、学校における道德の指導の時間においては、生命のかけがえのなさに触れ「生命を大切にしようとする心を育てる指導」を重点的に行う必要があるといえる。



## 生命が大切だと思う理由

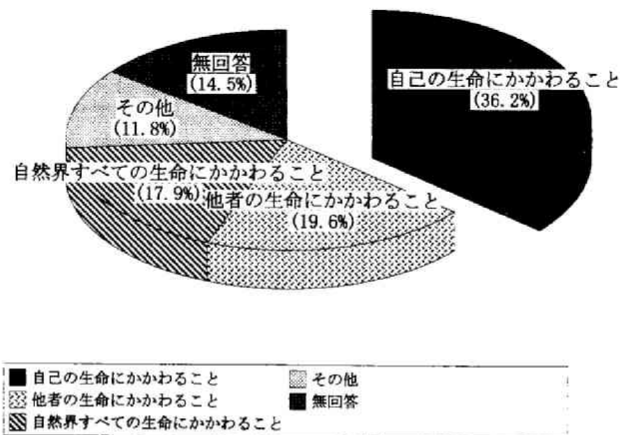


設問2 あなたは「生命があるんだな」と気付いたり考えたりしたことがありますか。またそれはどんな時ですか。

児童の回答を、生命の存在に気付く対象別に「自らの生命について・他者の生命について・自然界すべての生命について」と分けてみた。すると、自らの生命から「生命の存在」に気付いている児童が全体の36.2%を占めている。次に他者の生命にかかわること、自然界すべての生命にかかわることと続いている。

このことから、まず自分の生命のかけがえのなさに気付き、自らの生命を大切にしようとする心情を高め、それを他者の生命、すべての生命へと広げていく道徳の時間の段階的な指導が有効な手だてと言えらる。

## 生命の存在に気付く対象



全体として、低学年児童ほど生命を漠然ととらえ、高学年になるほど「生命は一つしかない・お金では買えない」など具体的にとらえている。とくに、高学年では「親からもらった命」という回答が20%近くを占め、理科や保健学習の成果といえるのではないかと。そうした成果をより高いものにするためには、全教科等での学習において、生命に関連する内容にかかわって、生命尊重という道徳的なねらいを明確にし、意図的に学習を構成しながら、児童の中に価値を意識化させていく必要がある。

### 3 研究主題に迫るための手だて

#### (1) 「生命尊重」の指導の重点化

生命に対する畏敬の念をはぐくむことは道德教育の大きな目標である。その道德性を育成する『道德の時間』においても、生命尊重という価値はすべての基盤となる。そこで、第3分科会では年間35時間のうち、今年度は10時間程度を生命尊重の指導にあてることとした。重点的に、何度も繰り返し指導することで、生命を尊重しようとする児童の道德的実践力に広がりや深まりをもたせられると考える。

#### (2) 道德の時間の段階的指導

「自らの生命」から、視野を広げていくための段階的指導を行う。自らの生命の尊さに気付いた児童は、他者の生命をも尊重し、強いてはすべてのものの生命を大切にしていけるのではないかと考え、生命尊重の指導を以下のように3段階に分けて考えた。

##### 第1段階 自らの生命の尊さに気付く段階

(誕生・はぐくまれた生命

・生き抜く生命)

##### 第2段階 他者の生命の尊さに気付く段階

(生命を守る・守られている生命)

##### 第3段階 すべての生命の尊さに気付く段階

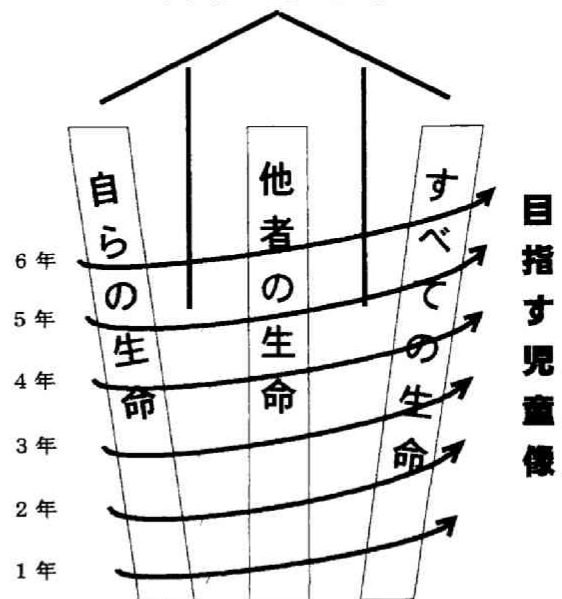
(すべての生命の重み

・守られているすべての生命

・守り続けねばならないすべての生命)

\*また、各学年において、この段階的指導を行い、その積み重ねにより、『かけがえのない生命を大切にする心』が、らせん状に高まっていくと考える。

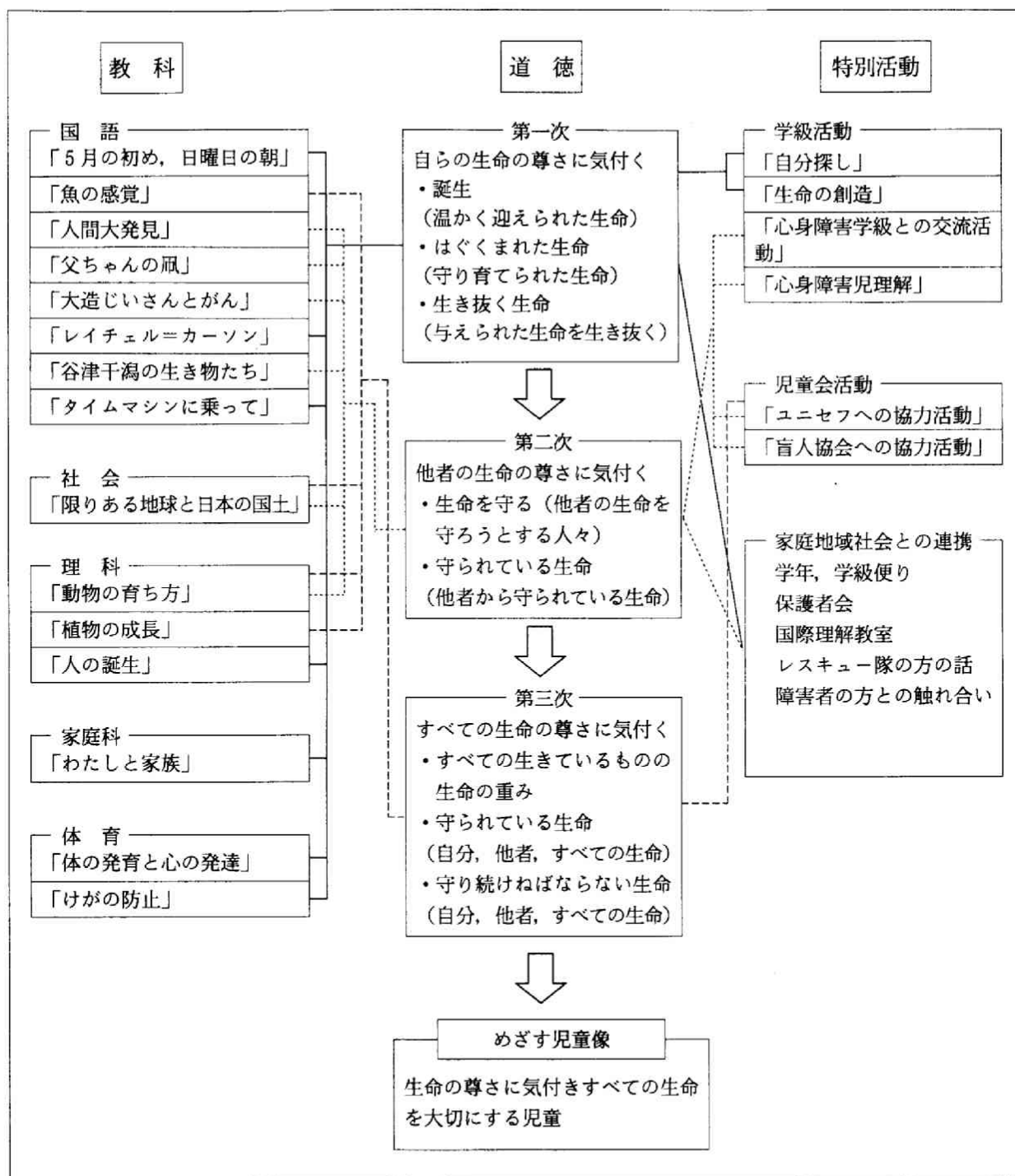
#### かけがえのない生命を 大切にする心



#### (3) 他教科等との関連

道德の時間のねらいにかかわる他教科等に含まれる道德的価値を明確にして、それぞれの指導に当たる。他教科等の学習を通して得られた生命に関する科学的な知識や心情が、道德の時間に深まりをもたせ、『かけがえのない生命』について、より広く深くとらえることができると考える。また、家庭や地域との連携を図り、家族から自分の誕生にまつわる話を聞いたり地域の人材を活用しゲストティーチャーの話を聞いたりする機会を設けることで、「生命」をより身近な視点でとらえていけるのではないかと考える。

4 他教科等との関連図例 5年道徳 「生命の尊重」



5 実践事例 (第5学年)

- (1) 主題名 「自らの生命の尊さ」 3-(2) (第一次, 3時間目)  
 資料名 『りかに命を分けてください』(講談社)より改作

(2) ねらい

生きていることのすばらしさを知り、自らの生命の尊さに気付き、生命を大切にしようとする心情を育てる。

(3) 展 開

	学習活動・主な発問と予想される児童の反応	留意点
導 入	1. 詩『命』を読み、本時の学習に関心をもつ。 ○どんな感じがしましたか。 ・悲しい。 ・なぜこんな詩を書いたのだろう。 ・だれの詩だろう。	・りかさんの写真を提示し実話であること、14歳で白血病でなくなったことを知らせる。 ・白血病について説明する。
展 開 前 段	2. 資料『りかに命を分けてください』を読んで話し合う。 ○治療を受け続けるりかさんは、どんなことを考えていたでしょう。 ・死にたくない。こわい。 ・病気になんか負けるものか。 ・治るって信じたい。 ・もう一度、家に帰りたい。 ・何で自分だけがこんな病気になったの。 ◎りかさんはどんな気持ちで、『命』の詩を書いたのだろう。 ・もっと生きたい。どうしても死にたくない。 ・健康な人が命を粗末にするなんて許せない。 ・命の大切さを分かってほしい。 ・生きたくても生きられない人がいることも分かって。	・発病前の様子をおさえる。 ・治りたい一心でつらい治療に耐えるりかさんの気持ちに十分共感させる。 ・死への不安、恐怖感にも気付かせる。 ・命の大切さに気付かせる。 *補助発問 命を大切にするととはどんなことだとりかさんは考えたのでしょうか。
後 段	3. 自分の生命について考える。 ○今こうして生きている自分の生命についてどう考えましたか。 ・今自分が生きているって素晴らしい。 ・生きていることが当たり前で、あまり深く考えたことがなかったが、精一杯生きたいと思った。	・ワークシートに自分の考えをまとめ、発表させる。 ・時間を十分に保障する。 ・意図的に指名する。
終 末	4. 教師の説話を聞く。	・自分をもっと大切にしようとする気持ちを高める。

(4) 考 察

段階的指導の第1段階の内容であったが、自分の生命を真正面から見つめることができ、次の段階への基盤となったと考える。他教科等との関連も、事前に学習した理科の「人の誕生」や道徳の「二度とない人生だから」の内容が、児童の考えを深めるために効果的であった。また、事後に学習した道徳の「北村さんの話」や国語科の「レイチェル＝カーソン」に、有効につなげていくことができた。

#### IV 集団や社会と主体的にかかわっていく心を育てる指導の工夫（第4分科会）

##### 1 分科会テーマ設定の理由

人間は一人では生きることができない。必ず、人々とかかわりながら生きている。そこに、人間社会が存在する。そして、人間は集団や社会とかかわっていく中で、それらと共に成長していく。人間がよりよく生きようとすれば、よき集団やよき社会とかかわらなくてはならない。また、よき集団やよき社会を形成するには、人々がそこに自ら主体的にかかわっていくことが大切である。つまり、積極的にかかわり、それをよきものにしていくことを通して、人は「よりよく生きる」ことができるのである。

しかし、近年、社会集団とかかわることをさける人々の増加から、大人も含めた社会全体のモラルの低下が指摘されている。

児童の様子にも、代表委員になりたがらない、落としものを見ても、知らない振りをしてしまう、縦割り集団を自分たちで運営できない、みんなが使うものを使っても片付けない、など自分を中心にして行動している傾向が見られる。しかし、児童が成長し、よりよく生きる力を身に付けていくためには、集団などのかかわりは大切であり、そのかかわりの中で価値観を形成し、人々と共に、成長するものと考えられる。

そこで、第4分科会では、よき集団やよき社会を形成しようとする自覚を高めることができれば、集団や社会に主体的にかかわっていく心と意欲が育ち、「よりよく生きる」ことができる考えた。そして、分科会テーマを「集団や社会と主体的にかかわっていく心を育てる指導の工夫」とし、その工夫の観点として、資料開発、指導過程の工夫の2点から迫ることとした。それにより児童が集団や社会とのかかわりの中で、自分が何ものであるかを知り、果たすべき役割や責任などを自覚して、主体的にかかわっていく心と意欲が育つと考えた。

##### 2 児童の実態調査・分析

###### (1) 調査目的

よき集団・社会を形成しようとする気持ちの基盤は、集団や社会に対する所属意識・規範意識・積極性であると考えた。そこで、この3点について、児童の実態を把握し、指導の工夫に役立てることにした。

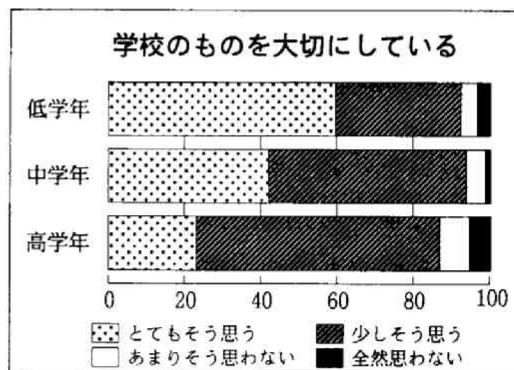
###### (2) 調査方法

- ① 調査対象児童は、都内8小学校の児童2～6学年 計558名
- ② 選択肢による質問紙法を用いた。

###### (3) 結果と考察

###### <規範意識について>

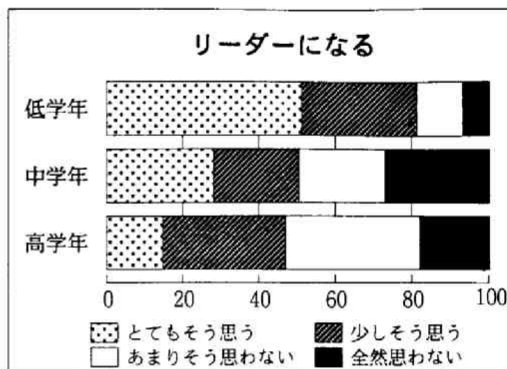
公共心や規則遵守に関しては、多数の児童が「守っている」「少し守っている」と自己評価している。ただし、学校では、家や地域に比べ数値が低くなっている。それは、「遊び道具や学習用品をもとに戻す、丁寧に扱う」「廊下階段を走らない」「チャイムの約束を守る」などを意識しながら



らも、守っていないことを児童自身が気付いている結果であろう。学校では教師に言われるからであり、他の場面で指摘されることが少ないと思われる。

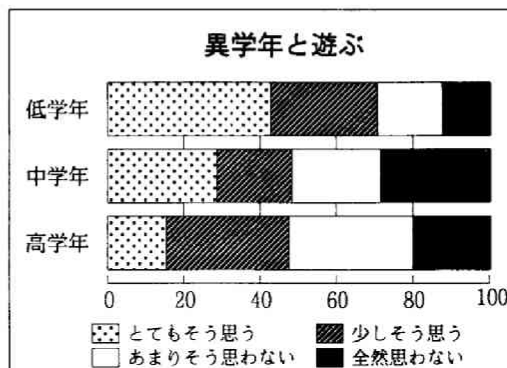
<積極性について>

学年が上がるにつれ、集団や社会に積極的にかかわっているという意識が低くなっていることが分かった。特にリーダーになりたいと思う児童は、低学年で8割以上いるのに対し、中学年で5～6割、高学年では半数に満たない。低学年では自己の気付きが不十分な部分もあり、プラスに意識しがちであるのに対し、高学年では自己を客観的に見つめられるようになってきた分、他者を意識したり、マイナスに自己評価したりすると思われる。

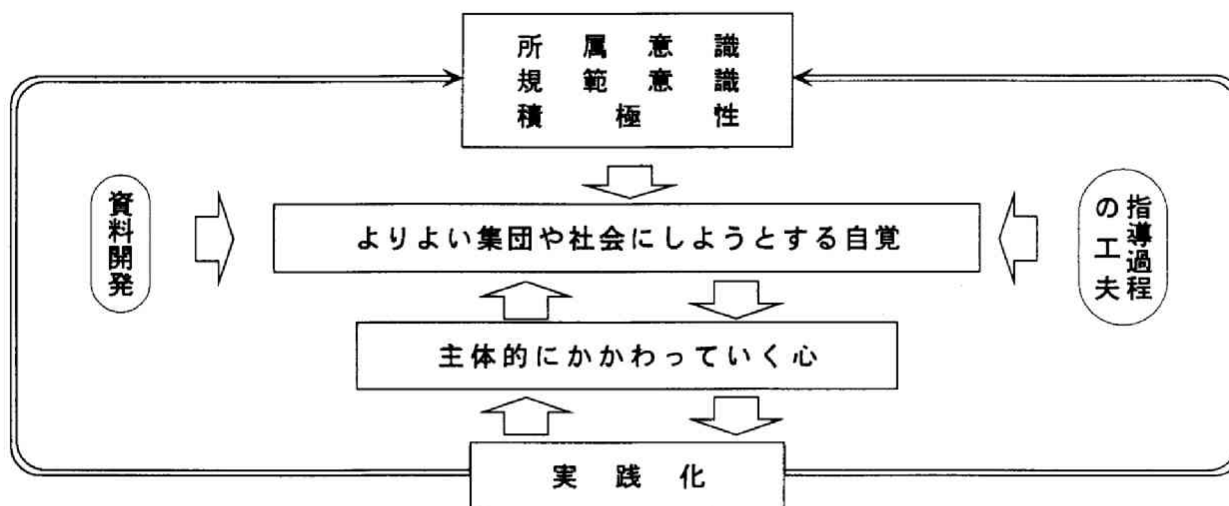


<所属意識について>

集団への所属意識は発達段階を追っても高まるどころか、逆に低くなっていることがわかった。特に地域における異学年交流についてはそれが顕著にあらわれている。「とてもそう思う」を選んだ児童は、低学年でも4割、高学年では2割に満たない。これは、各家庭の個別化が進み、地域活動が減少している実態があると思われる。



3 集団や社会と主体的にかかわっていく心を育てる指導の工夫



資料を開発したり、指導の過程を工夫したりすることで、よりよい集団や社会にしようとする児童の自覚を高めることができる。この自覚が主体的にかかわる心を生み、それをもとになされる実践の中で、基盤となる所属意識・規範意識・積極性が高まり、さらに、自覚と実践力が高まっていく。この繰り返しの中で、主体的にかかわっていく心は一層強まってくものと考えられる。

(1) 資料開発

道徳の時間において、よりよい集団や社会にしようとする自覚を高めるには、児童が意欲をもって授業に取り組めるようにすることが大切である。そのためには、児童の実態や教師の願いをふまえた資料を使うことが必要である。本分科会では以下の観点により、資料の開発を行った。

<b>&lt;心に響く資料&gt;</b>	
・児童の共感を呼ぶ    ・体験が生かされる    ・自分のこととして考えられる	
<b>&lt;選択・自作・改作時の留意点&gt;</b>	
<p>○表現について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文章全体の整合性</li> <li>・場面状況の分かりやすさ</li> <li>・児童の理解しやすいもの</li> <li>・無駄な文の削除</li> <li>・登場人物の精選</li> <li>・児童の実態に合っているもの</li> <li>・気付かせたいことをくり返す文章（特に下学年）</li> <li>・発達段階に応じた文の長さ</li> </ul>	<p>○内容について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人のものの見方、考え方、感じ方を引き出せる</li> <li>・多様な価値観が引き出せる</li> <li>・発問のポイントを作る</li> <li>・考えさせたい気持ちが直接表現されていないもの</li> <li>・ねらいとする価値に対応したもの</li> <li>・今日性、リアリティのあるもの</li> <li>・葛藤場面のあるもの（特に上学年）</li> <li>・児童の発達段階にあったもの</li> </ul>
<b>人権への配慮</b>	
<b>&lt;提示方法&gt;</b>	
<p>実物、VTR、写真、紙芝居、朗読、人形等          →インパクトがある    イメージをもちやすい    場面を特定できる    資料にひきつけ、ひたらせる</p>	

(2) 指導過程の工夫

指導過程を、1単位時間の授業だけにとらえず、授業の前（事前）、本時の授業（事中）、授業の後（事後）のすべてを指導過程と考えた。よりよい集団や社会を形成しようとする自覚を高めるためには、その価値に対する意識を持続してもつことが必要である。事前に計画された共通の経験を授業に生かしたり、授業後の経験を授業を振り返って考えたりすることができるような指導を工夫する。このように、事前・事中・事後のつながりを大切に指導することで意識が深まりながら持続し、それが価値に対する自覚を高めることにつながると思われる。

	段階	ねらい	具体的な手だて
指導過程	事前	気付く	各教科、特別活動、日常生活において豊かな体験の場をもつ。価値に対する意識（気付き）が持続・高揚するように記録に残す。（写真・日記・個人カード等）
	事中	とらえる 振り返る	資料提示の工夫、登場人物への声かけ、発問の工夫 展開後段の工夫、役割演技等の工夫
	事後	深める 生かす	子どもが主体的に取り組める実践の場をつくる。 実践できたことを認め励ましていく。また、クラスへ紹介する。

#### 4 実践事例（第2学年）

(1) 主題名 みんなの川 4-(1)

資料名 「ながれてきた空きカン」(自作資料)

(2) ねらい きまわりを守り、みんなで使う場所を進んで大切にしようとする心情を育てる。

(3) 指導過程の工夫

事前	気付く	学校行事 学級活動	クリーン作戦に取り組む。 クリーン作戦について感想を発表する。
事中	とらえる 振り返る	道徳	自作資料「ながれてきた空きカン」を読み、話し合う。
事後	深める 生かす	学級活動 生活科 道徳	郵便局見学にむけて、電車内のきまわりについて話し合う。 電車に乗り、郵便局見学に出かける。 資料「おじさんの手紙」を読み、話し合う。

#### (4) 展開

(資料開発 ●) (指導過程の工夫 ★)

	主な発問と予想される児童の反応	指導の工夫（第4分科会の研究の視点）	
導入	1. みんなで使う場所について、発表する。 ○みんなでする場所には、どんなところがありますか。 教室 図書室 校庭 砂場 公園 海や山 電車	・ねらいとする価値への方向付けをする。	★事前アンケート
展開前段	2. 資料「ながれてきた空きカン」を読み、話し合う。 ○たろうは、どんな気持ちでまわりのけしきや川の中を見ていたのでしょうか。 ・きれいで気持ちがいいな。 ・小鳥の音がきこえていいな。 ・川の中がすきとおっていてきれいだな。 ・近くの川もこんなだといいな。 ○ながれてきた空きカンを見つめていたとき、たろうはどんなことを考えたのでしょうか。 ・ゴミをすてるなど書いてあったのに。 ・きまわりを守っていない人があるよ。 ・拾って、持ち帰ろうかな。 ・せっかくきれいな川なのに。 ・おもしろそうだから、ぼくのも流してみたいな。 ◎お父さんの言葉を聞いてたろうは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・せっかくきれいな川なのに、空きカンを捨てるなんてひどいよ。 ・僕も捨てていたら、お父さんにしかられたかな。 ・みんなで使うキャンプ場や川を大切にしないとイケないよね。	・本物のコーナーを提示したり、ビデオの映像を通して資料に深く入れるようにする。 ・全員ゼッケンを着け、ライフジャケットを着けたたろうに、共感できるようにする。 ・自然の美しさを想起しながら、川の中のカンについて考えるようにする。 ・川の中にカンを投げてみたいなど多様な意見が出るようにしたい。 ・役割演技を通し、たろうの気持ちにより共感できるようにする。 たろう役 お父さん役	●価値に迫る資料提示 (自作資料) ●リアリティー ・疑似体験 実物のコーナー 川下りビデオ ★多様な価値観を引き出す発問の工夫 ★共感を呼ぶ役割演技 ★自分のこととして考える葛藤場面
後段	3. 今までの自分自身を振り返る。 ○みんなでする場所を大切にできたことはありますか。 あまり大切にできなかったことはありますか。 ・水道の使い方 ・砂場の片付け ・教室のゴミ拾い ・トイレの使い方	・ゼッケンをはずし資料から離れる。 ・大切にできなかったことを発表する子にも、自分を振り返られたよさを認めていく。	★自分を振り返る時間 (展開後段の工夫)
終末	4. 教師の話聞く。 クリーン作戦の写真を見せながら、ゴミ拾いした後の児童の感想を話す。	・1学期に取り組んだクリーン作戦で公園ゴミを拾ったことを思い出すようにする。	★過去の体験を今後を生かす



ながれてきた空きカン

たろうさん一家は、夏休みにかぞくでキャンプに出かけました。たろうさんは、お父さんとカヌーで川下りをするを一番たのしみにしていました。川原でライフジャケットをつけ、いよいよしゅっぱつです。お母さんが、「気をつけてね。」

と言つて、川の水でよくひえたジュースのカンを二本わたしてくれました。お父さんが後ろでこぎ、たろうさんが前でこぐことになりました。カヌーにのつて、川下りをしていくと川のりようぎしに、たくさんのお花や草花を見ることができ、鳥の声も聞こえてきました。「たろう、川の中をのぞいてごらん。」

パドルをこぐ手をゆるめながら、お父さんが声をかけました。「わあ、川の中がすきとおって見えるよ。」

「お父さん、川の中がすきとおって見えるよ。」  
「わあ、川の中がすきとおって見えるよ。」  
たろうさんは、川の中がすきとおって見えるよ。水の中までは見えませんが、小さな魚がむらむらと泳いでいるのを見ました。お父さんが声をかけました。「たろう、川の中をのぞいてごらん。」

たろうさんは、川の中をのぞいてごらん。水の中までは見えませんが、小さな魚がむらむらと泳いでいるのを見ました。お父さんが声をかけました。「たろう、川の中をのぞいてごらん。」

「たろうさん、はっとして思わず空きカンをにぎりしめました。やがて、カヌーは、ながれていく空きカンをおつていきました。」



(5) 考察

① 資料開発について

- ・児童の興味・感心や意欲を高め、登場人物の気持ちに共感したり、多様な考えをもつことができるような資料を自作した。キャンプ場という集団生活をする場所を、みんなが気持ち良く使うためには、一人一人がきまりを守り、その場所を大切にしようとする自覚が大事である。この自覚が集団や社会に主体的にかかわる心を生むことにつながるのではないかと考えた。

ここでは、「みんなで使う場所」というように、公共心のねらいを焦点化したほうが効果的であることが分かった。

② 指導過程の工夫について

- ・公共の場所についての事前の意識調査をもとに、児童の実態との相違や変容を把握することができた。
- ・資料提示で本物のカヌーを提示したとき児童は素直に驚き、多くのつぶやきも聞けた。またビデオの映像を通して、シュミレーションとして川下りを味わうことで、児童は資料の世界に入り込み、主人公の悩みや考えを自分のものとして受け入れ、より共感的に考えようとすることができた。
- ・本時において資料から離れて自分の生活を振り返るとき、必要に応じて補助発問を用いられるようにしておいたのは、有効であった。大切にできなかったことを発表した児童にも、自分をしっかり見つめられた点を認め自信を与えることで、よりよい集団をつくろうとする自覚が芽生えるのではないかと分かった。
- ・児童の体験を生かし、つながりを大切にす計画的な指導をするために、1学期のクリーン作戦の様子の写真を提示したことは有効であった。また、授業後その写真を提示しておくことで、意識の持続を図り、実践意欲につながった。

## ◇研究の成果と今後の課題

我々は、研究主題「よりよく生きる力を育てる道徳授業」を掲げ、本年度の研究に取り組んできた。道徳の4つの視点をもとに分科会を構成し、それぞれの研究のポイントを明確にするとともに、「目指す児童像」・「分科会主題」・「仮説」を設け具体的な授業実践を通して研究を進める中で、次の点が明らかになった。

### 1 研究活動全体を通して

社会の激しい変動にもまれながらも、子どもたちはたくましく生きようとしている。しかし、順応性に富み優れた対応力をもつ子どもたちは、社会の影響を受けやすく、情報の善し悪しを問わず吸収し、自己形成の要因にしてしまう傾向があるように思われる。それだけに、子どもたちがこれからの時代をよりよく生きていくためには、道徳的価値を深く自覚し、それに基づいた情報選択能力と判断力・行動力を身に付けることが大切である。

我々は今回の研究に参加して、子どもたちに人間性と社会性の基礎が培われる小学校という時期の道徳教育の在り方を真摯に話し合い、研究を進めることの重要性を共通理解できた。そして、今後は子どもの心に響く道徳の時間の指導の充実と、全教育活動を通して行われる道徳教育の計画的展開を図っていかねばならないと考える。

とりわけ、学校や学級内の教師と児童、児童相互の温かい人間関係を構築するとともに、指導内容が日常生活に生かされるような手だてを摸索すること、また、家庭や地域社会との連携を図るよう配慮することなどが重要な課題と認識している。

### 2 各分科会の研究活動を通して

第1分科会では「自己を見つめ、主体的に生きようとする心を育てる指導の工夫」を目指し研究を進めた。この結果、児童が自己を深く見つめる時間の確保と相互交流の大切さが分かった。今後は、資料の開発やさらに自己を内省化させるための発問の工夫を進めていくことなどが課題である。

第2分科会では「互いに認め合い、ともに生きようとする心を育てる指導の工夫」を主題として、チームティーチングを授業に活用することに取り組んだ。この結果、資料提示での役割分担や個に応じた配慮などに有効に機能することが分かった。今後は、この成果を保護者や地域の人々などの協力に発展させることが課題である。

第3分科会では、「かけがえのない生命を大切にすることを育てる指導の工夫」を目指し、生命尊重を中心に研究を進めた。この結果、目指す児童像に向けた指導項目の重点化と段階的指導、他教科等との関連的な指導が効果的であることが分かった。今後は、時数に応じた資料開発と教科等の内容と道徳の時間を具体的にどのように関連させるかが課題である。

第4分科会では、「集団や社会と主体的にかかわっていく心を育てる指導の工夫」を主題として、資料開発と指導過程の工夫を中心に研究に取り組んだ。その結果、教師の経験に基づいた身近な素材の資料化や道徳の時間を中心とした事前・事中・事後の全体を指導過程ととらえることが、児童の課題意識を発展させるのに有効であることが分かった。今後は、体験活動との関連を図った指導を構想することが課題である。